

審査結果の要旨

報告 番号	乙 第 3026号	氏名	最所 公平
審査担当者	主査	石竹達也	(印)
	副主査	川口 巧	(印)
	副主査	梅野博仁	(印)
主論文題目：Effectiveness of the GerdQ Questionnaire for Diagnosing Gastroesophageal Reflex Disease after Esophagectomy for Esophageal Cancer (食道癌に対する食道切除後における GerdQ 問診票の有用性についての検討)			

審査結果の要旨 (意見)

本論文は、食道癌術後患者 124 名を対象に、術後の主な合併症の一つである胃食道逆流症 (GERD) の診断における GerdQ 問診票の有用性を検討した臨床疫学研究である。プライマリケアなど一般診療の場で GERD 診断のための補完的ツールとして使用されている 6 項目からなる GerdQ 問診票と客観的検査 (上部消化管内視鏡検査と 24 時間 pH モニタリング検査) 結果で判定した GERD との関連性を、術後 1 ヶ月目、術後 1 年目、術後 2 年目において検討した。GERD の発症率は術後経過とともに増大 (31.6-49.2%) しており、術後 1 年目以外の時点で GERD の有無別 GerdQ スコアは、GERD 有りでは有意に高かった。GERD 有無の判別に対する最適な GerdQ スコアのカットオフ値は、術後経過時間により異なっており、感度、特異度のバランスの点からも有用なツールとはなりにくいことを明らかにした。一方、GERD 有無に対して GerdQ の項目別の関連では、呑酸の症状のみが有意であったことを示した。GERD 発症に対する感度、特異度は、術後 2 年目ではカットオフ値 7 点で感度 77%、特異度 56% とプライマリケアでの成績と比較的近似したが、その他の時点では、感度と特異度のバランスが悪かった。本論文は、食道癌術後の合併症である GERD の診断補完ツールとして GerdQ 問診票の有用性が不十分であることを明らかにし、新たな問診票作成の必要性を示した点で、貴重な臨床疫学研究であり、学位論文として十分に価値があると考えます。

論文要旨

胃食道逆流症 (GERD : gastroesophageal reflux disease) は食道癌術後の主な合併症の一つである。GerdQ 質問表はプライマリケアでの GERD 診断のために開発された質問表であるが、食道癌術後の GERD 診断における有用性は定かではない。今回、我々は食道癌術後の GERD 診断における GerdQ 問診票の有用性を検討した。2010 年 1 月から 2016 年 12 月に当院で食道癌に対し右開胸開腹食道亜全摘、胃管再建術を施行した患者を対象に、術後 1 ヶ月目、術後 1 年目、術後 2 年目に上部消化管内視鏡検査、24 時間 pH モニタリング検査による GERD 診断、GerdQ 問診票による症状評価を行った。GerdQ 問診票のスコアと客観的検査の関連性を評価した。GERD の発症率は 31.6-49.2% だった。GerdQ に対する感度、特異度は、術後 2 年目ではカットオフ値 7 点で感度 77%、特異度 56% とプライマリケアでの成績と比較的近似したが、その他の時点では、感度と特異度のバランスが悪かった。また、最適なカットオフ値も各時点で異なっていた。GerdQ 問診票は食道癌術後患者における GERD 診断には有用ではない。